

## 高等学校における実践①(5月)

### 「Q-U」研修会

#### ○ 本研修会の設定趣旨

高等学校においては、「Q-U」を実施してはいるものの、その結果が十分に活用されているとは言いがたい。本校においても、「Q-U」は、学級生活不満足群にプロットされている生徒をピックアップするためだけの利用にとどまっている。学級集団がどのような状態にあるのかを把握したり、学級の課題を見つけて学級経営に生かすという観点では十分に活用されていない。

そこで、本研究を進めるに当たり、学級担任だけでなく、その学級にかかわる教師に「Q-U」の見方や活用法を知ってもらうために、「Q-U」の研修会を開くことにした。研修会終了後、実際に本学級の「Q-U」の結果を見ながら、事例検討を行い、対応策を一緒に考えることにした。

#### ○ 事前準備

- (1) 学級担任に「学級把握シート」に記入してもらう。
- (2) 学級担任が記入した「学級把握シート」と本学級の「Q-U」の結果から、事前に研究委員による「Q-U」(第1回目)の検討会を実施する。

#### ○ 「Q-U」研修会

##### (1) 参加者

学級担任、副担任(3名)、学年主任、教育相談担当者、研究委員

##### (2) 「Q-U」研修会の流れ

ア 研究委員より、「Q-U」についての基本的な見方及び分析の仕方についての説明

- (ア) 「Q-U」の概要
- (イ) 「Q-U」から分かること

- I 個人についての情報
  - ・生徒一人一人の学級生活の満足感
  - ・生徒一人一人の学校生活における意欲
- II 学級集団についての情報
  - ・学級集団としての成熟の状態
  - ・学級集団の雰囲気
- III 生徒の学級集団における相対的位置

イ 参加者全員による、本学級の事例検討

「検討会シート」に基づいて実施する。

##### (ア) 本学級の抱えている課題(学級担任より)

- ・一部の生徒に頭髪や服装の乱れが出始めた。
- ・落ち着きがない男子生徒が数名いる。学級担任が注意をすれば素直に従うものの、落ち着いた状態が持続しない。
- ・男子生徒を注意するたびに授業の流れが中断するので、静かに授業を受けたい女子生徒が迷惑そうな顔をするのが気になる。男子生徒と女子生徒との間に、授業や学校生活に対す

る意識の差を感じている。

- ・ Bは、入学当初から生活面での乱れが目立ち、常に落ち着かない。授業中、教科担当者から注意を受けることも多い。Bにつられて数名の男子生徒と一緒に騒ぎ、授業に集中できていないようだ。
- ・ Cは、精神的に幼いところがあり、同学年の友人とは話題が合わないだろうと感じる。学級内で、いじめやからかいの対象になることが懸念される。
- ・ Dは、中学校時代に不登校を経験しているが、頑張って登校している。統率力があるので、学級担任は、学級のリーダーとして期待している。一方、注意しても素直に聞き入れることができないような面も見受けられる。
- ・ Dを含む女子生徒の3人グループは、学級に与える影響の大きいグループである。

(イ) 「Q-U」の結果から分かること

- ・ 学級生活満足群にプロットされている生徒が多い(67.5%)ことから、ある程度のルールとリレーションは確立していると考えられる。
- ・ 承認得点において若干ばらつきが見られる。
- ・ AとBは、学級生活不満足群にプロットされており、個別に対応することが望まれる。とりわけAに関しては、要支援群にいたるため、早急な対応が必要である。
- ・ Cは極端に高い位置にプロットされており、過剰適応の可能性も考えられる。
- ・ Dを含む女子生徒の3人グループに関して、D及びEが学級生活満足群、Fが学級生活不満足群にプロットされている。2つの群に渡ってプロットされているため、グループ内でのメンバーの序列化が懸念される。Fがグループ内で嫌な思いをしていないか、早急に確認が必要である。

(ウ) 検討会で出た、参加者の意見及び感想

- ・ 入学して間もない1年生であるため、リレーションよりも、学校生活を送る上でのルールやマナーを身に付けさせることを優先した方がよいのではないかと。
- ・ Aに関しては、「気になる生徒」として全く認識していなかった。
- ・ Bは、教師の日常観察と「Q-U」の結果が一致している。
- ・ Bを始めとする数名の男子生徒グループに関しては、学級担任が一人で抱え込むのではなく、副担任が指導に入るとよいのではないかと。
- ・ Aに関しては、部活動の顧問が部活動においてかかわりを密に取るようにしてはどうか。
- ・ Cに関しては、学力面でのサポートが必要なのではないかと。
- ・ Dを含む女子生徒の3人グループは仲がよさそうに見えるが、Fがグループ内で嫌な思いをしている可能性があるとは意外であった。

(エ) 参加者全員による、共通の見解

- ・ 学級生活満足群にプロットされている生徒が多い(67.5%)が、承認得点においてばらつきが見られる。

= **学級の中で「認められていない」と感じている生徒が多い。**

(オ) 参加者全員による、対応策の検討

**「認める」活動を取り入れる。**

↓  
生徒同士が「認め合う」活動を行う前に、「教師と生徒」の1対1の信頼関係を築くことが大切である。

↓  
「高等学校生」（青年期）という発達段階においては、学級全員の前で直接ほめることは、生徒によっては逆効果にもなり得る。

↓  
**間接的にほめる活動を取り入れてみてはどうか。**

(カ) 対応策の決定

- ・学年主任の提案で、「間接ほめ大作戦」という取組を実施することにした。

○ 実践を振り返って

- ・「Q-U」の基本的な見方を知ってもらうよい機会になった。
- ・本学級の生徒に対して、情報の共有や共通理解を図ることができた。
- ・可能であれば、学年団全員に参加してもらったほうがよい。
- ・具体的な対応策を決定したことで、学級担任の学級経営の方針が明確になった。